

おわりに

今回の事案は、MBCが先行しているテーマにKTSクルーが後から割り込んだ形になったことが、MBCや取材対象に対する遠慮を生み、それが発端となったようにも見える。MBCが既に形にしつつある番組を後追いしているかのような“うしろめたさ”に近い感情があったとしても、それをKTSにしかできない新しい切り口の、より独創的な取材活動、番組制作の工夫・開拓に昇華させることはできなかったのだろうか。

他局と同じ取材手法で後追いをしても所詮周回遅れのランナーになるだけである。せっかく女子新体操部のOGをリポーターに起用していたのだから、同じ手法をあえて取る必要はなかったはずだ。むしろ、新体操の醍醐味を知るOGリポーターという強みをフルに活かすことによって、生徒たちとの距離の近さなどに焦点をあてた独自の切り口、見せ方で番組をつくることもできたのではないだろうか。

これは、日々の仕事に追われる取材現場、制作現場にいない者の、ぜいたくな要求なのかもしれない。だが、番組制作に携わる者が常に独創性を目指す姿勢を失わずに行動するか、せめてそうあるように試みるのでなければ、テレビはしだいに個性を失い、衰退への道をたどりかねないのではないか。

また、放送される番組はどれも、制作にかかわる者一人ひとりの情熱が込められた「作品」であってほしい。それは、テレビを見る者だけではなく、テレビ番組をつくる者もまた心の底に抱いている願いであろう。番組制作者に情熱がなければ、視聴者に良質な番組を届けられるはずがない。KTSの制作体制の現状が、スタッフの制作への情熱をそいでいるようなことがあるとすれば、その改善が望まれるところである。KTSの「放送人育成プロジェクト」の試みは、まさにこの制作現場の現状への危機意識に由来するものであり、待遇面だけでなく教育・研修の機会における社員と派遣スタッフの差を可能な限り埋め、仕事への思いを共有できる職場づくりにつなげることを目指しているとのことなので、その試みの行方を注視したい。

プロの集団であるはずの番組制作の現場で、だれもが「それは、まずいよね」と感じる手法がとられてしまったことは、何らかの警告と捉えるべきかもしれない。より社会的な影響力の大きなテーマや取材対象を相手にしているときに、万が一にも同様の行為があったら、番組内容がいかに優れていたとしても、番組全体が非難されかねない。殊に現在のように、マスコミに対する不信感が高まっている状況にあっては、放送に対する信頼そのものが大きく揺らぐ危険性なしとしない。

本件事案が、多くの放送人にとって他山の石となることを期待したい。